

学び合うことの意義の探究

—授業におけるコミュニケーションの分析—

柴田 好章 大学院教育発達科学研究科助教授

個性は集団の中でこそ、発揮され磨かれる。このような考えが、とくに日本の学校教育においては大切にされてきました。様々な教科の中で、正解のあるなしに関わらず、学級集団として問題を討議し、互いの思考を高めることが、理想の授業として追求されてきました。いっぽう、学級の閉鎖性に対する批判や、教育の自由化や学習の個別化の動きなど、従来の学級という集団の単位を問い直す動きもみられます。学習における個と集団の関係は、教育学の古くからの課題でもあるのですが、今日のこのような状況のなかで、個と集団の関係を捉え直し、個別学習には解消しえない、集団で学ぶことの意義は何かを問い直すことが課題であると考えます。しかも、これを単に理念として論じるのではなく、実践を分析した成果にもとづき、誰もが承認しうる事実を積み重ねることが大切であると考えています。

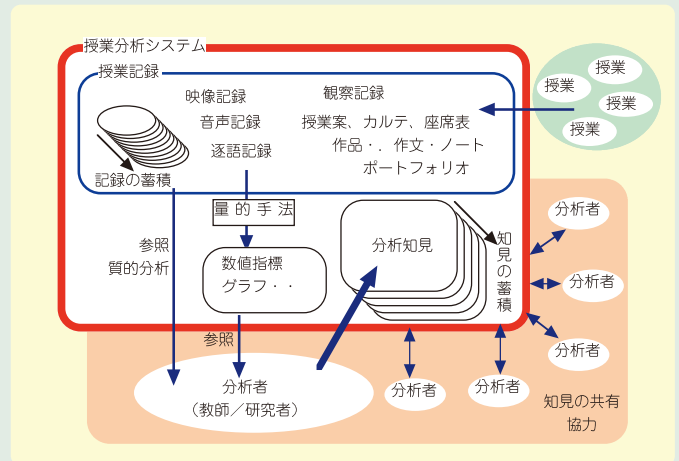
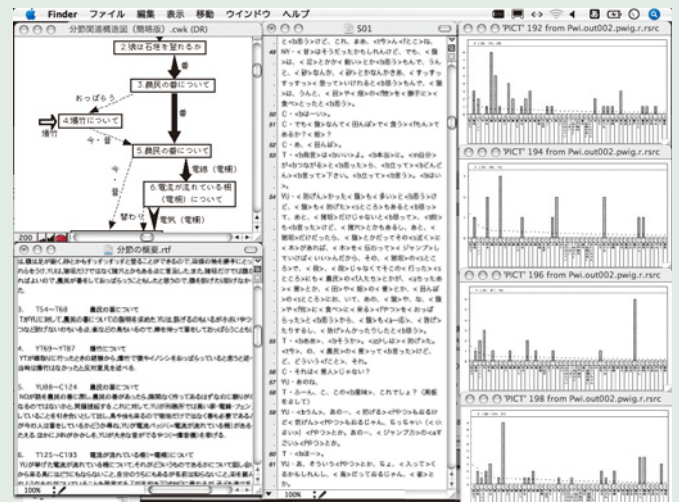
こうした問題意識に基づき、私の研究は、集団のもつ教育力を、できるだけ研究者の解釈に頼らずに、可視化することを目指しています。とはいえ、集団の教育力ですから、個人の学力などとは違い、テストで直接に測定することはできません。そこで、授業のすべての発言・会話を文字化して、コンピュータで処理し、コミュニケーションの特徴を分析しています。これまで、語の出現頻度や、授業のどの場面で特

定の語が頻出しているかの出現パターンを、数値化したり、グラフィカルに表示したりする方法を開発してきました。一例を図1に示します。これらを通じて、個々の学習者が持っていたアイデアが他者に共有されていく過程や、当初は誰も考えていなかったアイデアが話し合いの中で生じる過程や、ある一人の個性的な発言が全体の追究の方向を動かしていく過程など、学級という学びのコミュニティの中で行われているダイナミックな相互作用の諸相を記述・表現してきました。

さらに現在、図2に示すように、教育の研究に携わる多くの人々が、ネットワーク上で、参加・協力・連携し、授業の事実に基づいて、知見を生成し共有できる、授業分析システムの開発を進めています。

図1 小学校社会科授業における話し合いを分析している画面の一例です。1時間の話し合いの授業を23の分節(場面)に区切り、それぞれの分節の特徴や、分節の関連を、語の出現頻度に基づいて分析しています。左上の図は、第2分節から第6分節までの分節間の関連構造図です。話し合いの展開に応じて、主要な話題がどのように推移しているかを示しています。その他の画面各部分に表示されているデータは以下の通りです。左下:分節の概要を示すテキストデータ、中央:授業の音声記録を文字化した逐語記録、右:分節ごとの語の出現頻度グラフ(第2分節から第5分節)。

図2 開発中の授業分析システムの概要図です。主要な授業分析手法(量的手法、質的手法)の機能を内包し、授業の様々な記録と、各種の分析手法の結果等を統合的かつ質的に検討できるような環境を備えています。



1
2